

平成30年度 小平市立小平市立第十一小学校 学校評価報告書

学校教育目標	○かしい子 自ら学び自ら考える子 ○つよい子 めあてを決めて行動しやりぬく子 ◎やさしい子 相手を思いやり協力し合う子(平成30年度の重点)	
---------------	--	--

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 児童にとって、安全で楽しい学習・生活の場であること、いじめのない、児童がよりよく成長する、ぬくみのある学校を目指す。
- 【目指す児童・生徒像】 主体的によりよく問題を解決する能力、思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、逞しく生きるための健康と体力をもつ児童を目指す。
- 【目指す教師像】 全ての教職員が全ての児童の担任であるという自覚をもち、児童一人一人を大切に、授業力・指導力の向上に努め、資質を高める教師を目指す。

前年度までの学校経営上の成果と課題

経営方針の実現に向け、「こころ」「体」「いのち」に関する学習内容を総点検し、6年間で学ぶべき「いのちプロジェクト」を作成し系統的に指導を行い、児童の生きようとする意欲や願い、やさしさをよりよく育てることを目指して教育活動を進めた。80%以上の保護者が児童の「いのち」の捉え方が変化したとアンケートに回答するなど、成果は着実に上がってきていると考えられる。また、関係者評価でも肯定的な評価をいただいたとともに、教職員、各自が「いのちの学習」に取り組み、授業力を向上させることもできた。しかし、学校評価の教員アンケートによると、「いのちの学習(いのちプロジェクト)」のプログラム化が一年間で十分になっていないとの課題が出されていた。今年度も学校教育目標の重点を「やさしい子」として全学級で「いのちの学習」を実施し、児童にいのちを実感させる機会を通して自尊感情を育み、児童個々の自立心を養成して、また、新学習指導要領移行期間が始まる今年度は、小平市教育振興基本計画に基づき「学校は子どものためにある」という原点に立ち返り、課題解決にあたる。また、地域・家庭とともに本校の特色を生かし、学校の役割を見つめ直し、教職員、保護者、地域の方々との一人一人が参画し、地域の学校(コミュニティ・スクール)としての基盤をつくる一年としていく。

	具体的方策		第1回評価		課題と対策		第2回評価		学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
			努力目標	成果目標			努力目標	成果目標		
学力向上	①授業の開始時刻・終了時刻を守る。 ②授業の始めと終わりのあいさつを確実に行う。 ③「はい」「立つ」「です」のルールを徹底する。		4	3	授業時刻を守り、開始、終了のあいさつを実施できている。ただし、「はい」「立つ」「です」のルールの定着具合については、児童の実態により学級差が見られる。学年主任を中心に学年間で学習規律を共通理解し、児童の学びがより活性化される学習規律の定着を目指す。		4	3	・低学年からの積み重ねで、自然と規律が身に付き実践できている。 ・開始、終了時刻を徹底することが望まれる。 ・東京ベーンシック・ドリルが終了した児童向けの発展用ドリルをやれると更に良い。	授業の開始時刻が守れないことがある。特に月曜日の朝は、全校朝会からの戻りが遅くなり、1時間目の開始が遅くなっている。来年度から雨の時は、体育館に移動せずに放送朝会を実施するなどの具体的な方策を講じる。さらに、教員も児童の手下となるように時間を守り授業を始める意志を高く指導に当たる。 東京ベーンシック・ドリルの診断テストから、全学年ともに表、グラフ、図形が弱いという傾向をつかんでいる。児童個々の苦手領域も把握できているので、的確に指導し、習熟させることが課題である。来年度は東京ベーンシック・ドリルの苦手領域を繰り返し行わせて習熟させるとともに、補習(きりっとタイム)で個別の苦手領域を集中的に取り組みませ習得を実感させて、できる喜びを感得させて算数好きの児童を育てていく。
	①東京ベーンシックドリル診断シートを毎学期行う。 ②朝学習や家庭学習を活用し繰り返し取り組む。		4	2	全校で東京ベーンシックドリルの診断シート正当率が全校で90%を目指している。5月に実施した診断シートでは、2年生から6年生までの平均正答率が76.2%であった。各学級の東京ベーンシック・ドリルの実施率は100%であり、活動を2学期も同様に行って児童の基礎基本の学力の向上を目指していく。		4	3		
健全育成	①年3回のあいさつ運動に取り組む。 ②毎朝、教室や玄関で児童を迎え、教職員自らあいさつをする。		4	4	教員アンケートの結果、あいさつに対する評価(A、B)が数値的にも高くなった(85→100%)。同様に、児童のアンケート(84%)、保護者アンケート(86%)も8割以上が肯定的な評価である。課題は、どの対象者のアンケートでもA評価(よくあてはまる)が少ないことなので、A評価に該当する素晴らしいあいさつをする児童の育成を目指して、保護者、地域、教員が連携して指導し、励ましていく。		4	4	・あいさつが日常的にできる児童が少ない。自主的に挨拶できる子の育成を意識し、指導する必要がある。 ・取組がしっかりとしているため、児童は安心して過ごしている。	昨年から、挨拶が自らすんで、できていないことが問題として保護者、地域の方から上がっている。声をかけるとできるが、児童からすすんで、挨拶をすることができないことが多い。次年度以降の対策は、自主的に挨拶ができる児童の育成を意識して、保護者、地域、教員がともに同じ理想とする児童像をイメージして、子どもたちと接して、日常的に指導をしていく。 例年通り「ふれあいアンケート」を児童に年3回実施して、一人一人と教育相談を担当を行い、気になる児童へのケアを即時的に行ってきたが、今年度は長期欠席する児童が例年に比べて多いため、個々の児童に寄り添い見守る態勢を学校組織全体でつくり、多様なアプローチができるようにする。また、日常的に児童が教育相談等を自発的に活用できるような環境を整えていく。
	①いじめ見逃しゼロに向けて児童へのアンケート調査を実施する。 ②早期解決に向けて月2回生活指導連絡会を開催する。		4	4	いじめ見逃しゼロに向けての児童アンケートを実施し、その内容を受けて学級担任が一人一人詳しく聞き取りを行い、一件、一件問題を詳細に明らかにする仕組みが軌道に乗ってきた。学年でも連携し、いじめの情報も共有し、いじめの見逃しゼロに生かしている。早期に発見、話し合いなどで解決が見られたいじめを2学期以降も全教員で慎重に見守っていく。		4	4		
体力の向上	①体づくり運動の指導を研究成果を基に実践する。 ②体力向上旬間を設け、運動の日常化を目指す。		3	4	アンケートによると体力づくりができていたと答えた児童が84%であった。今年度は、スポーツテストの方法を変更して、児童に運動の仕方理解させてからテストを実施した。結果も良好で伸びが見られた。努力目標の評価が「3」に留まっているので、2学期以降一昨年度までの研究成果を今年度赴任した教員に校内講習等で伝達し、授業に積極的に生かしていく。		3	4	・休み時間等の様子を見る限り、体を動かすことが好きな児童が多く感じる。 ・様々な取組があり、それぞれ工夫されていると思う。	体力づくりへの意欲が高い児童が多く、スポーツテスト等の結果も向上している。課題は、児童による二極化の傾向が見られることである。意欲が高い児童は、体力向上し、意欲が高くない児童は、体力向上がなかなか図れていないため、体力的な差が広がっている。そのため、競うのではなく楽しみながら運動を行う経験をさせることが必要であり、体育の授業を改善していく。 校内OJTを実施してから、親子参加型体育授業を各学年で学校公開を実施した。教員アンケートからも指導の手応えを感じていることが分かった(7月78%、12月95%)。親子参加型体育授業は軌道に乗っており、一昨年度までの研究成果を実践し続けて根付かせなければならない。来年度以降も体育に関する校内OJTを実施し、児童の体力向上を支援し、効果的に高められる環境を整えていく。
	①学校公開時に親子de運動を開催するなどして家庭での運動の実施に取り組めるよう啓発する。 ②なわとびや長縄、持久走などに関する体力向上旬間を設け、運動の日常化を目指す。		2	4	児童、保護者からのアンケートでの評価(9割以上肯定)は高く、活動が定着できていることが分かった。ただ、学校公開日の保護者アンケートに「親子de運動を我が子と行えることさらに。」旨の意見を(数名)からいただいた。2学期以降、親子de運動の実施の仕方について反省を生かして、実施していく。		3	4		
特色ある学校づくり①	ゲストティーチャーの招聘など、外部人材を活用した授業を学期に1回以上実施する。		3	2	例年通り、地域の方々との活動を年間計画に基づき、実施している。昨年作成した地域がボランティアの方との連絡一覧表を活用して、活動の引き継ぎや打ち合わせを十分にやり、活動内容等を確認することができた。1学期に外部の人材等の活用ができた学年があったので(2学期に集中しているために)、来年度に向けて年間の学習過程の変更を当該学年と調整していく。		4	4	・児童自ら「自分は地域を担う一員である」に気付くことができるような活動を実施するとよい。 ・児童は様々な活動に積極的にに関わり、主体的に活動している様子が放課後子ども教室等で分かる。	地域の方、保護者の方との学習を計画的に実施した。また、今年度はコミュニティ・スクール準備委員会の委員と連携して、地域との関わりを持った授業を行った。ただし、児童の実感は地域の一員であるという意識が薄く、児童の内心に根付いてきているとは言いがたい状況が学力テストのアンケート回答から分かった。来年度は、一つ一つの行事の年間予定を整理して無理なく実施し、児童に振り返り等をじっくり行わせて自分事として捉えられるように学習を展開する。 コミュニティ・スクール推進委員会を立ち上げ、組織基盤を構築するための話し合いを月に一回以上実施する。今年度コミュニティ・スクール準備委員会を作り、CS委員との話し合いを月1回のペースで実施している。また、OJTの一環として、本校教職員対象としたコミュニティ・スクールに関する講演会を開催するCSの指定を先行して受けている近隣小学校の教職員や地域の代表者に直接、話を聞く場を設けて、CSでの学校の役割、地域との連携等を具体的に学び、本校の実態に合った組織を構築していく。
	コミュニティ・スクール推進委員会を立ち上げ、組織基盤を構築するための話し合いを月に一回以上実施する。		4	4	今年度コミュニティ・スクール準備委員会を作り、CS委員との話し合いを月1回のペースで実施している。また、OJTの一環として、本校教職員対象としたコミュニティ・スクールに関する講演会を開催するCSの指定を先行して受けている近隣小学校の教職員や地域の代表者に直接、話を聞く場を設けて、CSでの学校の役割、地域との連携等を具体的に学び、本校の実態に合った組織を構築していく。		4	4		
特色ある学校づくり②	いのちの学習の実践を『いのちプロジェクト』に則り、各学級で学期ごとに1回以上行う。		4	3	『いのちの学習』の実践についての保護者アンケートによると否定群が未だに17%(昨年30%)いるなど、具体的な学習の内容や主旨が各家庭に伝わっていないと言いがたい。授業の改善を進めるとともに、研究授業の様子をHPに公開したり、学校公開の授業参観日に授業を行ったりするなどして、さらに広く認知されるように努力する。		4	4	・様々な体験で感じたこと、聞いたことにより、児童の自尊感情が育まれているように感じる。 ・自分を大切にできるから、他の人も優しくなれる。よい取組である。継続を望む。	『いのちの学習』の実践について校内掲示、保護者会等で保護者、地域に知らせた為に認知度は高まって(70%→83%→89%)きた。来年度は、ここ2年間構築してきた学習内容の系統性を踏まえて学習活動を進めて、児童の振り返りやアンケートを実施して変更等を確認して、カリキュラムの整合性の確認し、『いのちの学習』の学習過程をバージョンアップする。 年間計画に基づいて、充実した活動を実施できた。課題は、本校で恒例の学習活動として保護者、児童にも認知が高い活動であるが、実施時期、活動内容が固定化してきている部分も散見されたので、現時点での本校の教育課程に合わせて変更や刷新など新しい展開を盛り込んだ来年度計画を行い、来年度実施する。
	①六中学区における小・中連携教育に関する取組を実践する。 ②幼稚園・保育所と連携した取組を実践する。		3	3	今年度、各分科会の話し合いで決定した具体的な取組を各分科会リーダーが本校教員に周知し、全校共通の取組として実施する。 2学期以降、講演会がより充実した活動になるために以下の点に留意して活動を進めていく。1. 有意義な交流になるように活動の目的、意義を意識させる事前、事後の指導の力を入れること。2. 交流圏の職員との綿密な事前の打ち合わせすること。		3	3		